TS娘「お嬢様学校に行ったら処女奪われた件」

六花リンデル@TSメス堕ち信奉民

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

『男である事を忘れられなくて「俺は男だ！」と言い張るバスト１００越えのＴＳ娘が親に言われて渋々、寮付きのお嬢様学校に入れさせられ、同室になったふたなり巨根生徒会長に薬を盛られた挙句にレイプされ、そのときの写真をネタに様々な羞恥プレイをさせられ、トドメにネットの生配信でメス堕ち絶頂しちゃうのをお願いします。』

という要望の元、書き上げました。リクエストされた方、また、私の作品をお待ちになっていた方。久方振りの私の作品をお納めください。

目次

前編 1
後編 47

前編

1

「オレは男だ！　女なんかじゃない！」

俺の声が、居間に響き渡る。

「……イブキ、もう辞めにしないか？　父さん達も、お前の為ならなんでもしてやりたいがそればっかりは何にも助けになってやれないんだよ」

「そうよ、イブキちゃん。お母さんもお父さんも、伊吹ちゃんのこと、大切な娘だって思ってるから」

気持ち高めな可愛らしい女の子の声。俺の怒りの身振りに合わせてどたぷんっ♡と揺れてしまう大きな胸。肉付きは良いが決して筋肉質ではない滑らかな四肢。

何もかも、認められない。

困り果てた、そんな顔で見合わせる両親。迷惑をかけたいわけじゃないけど、だけど、

こればかりは譲れない。

「……分かった。それなら、お前はここに入れ」

「……聖エスペランサ女学院……？」

疲れたようにため息を吐きながら、父が取り出して机の上に置いたのは『聖エスペランサ女学院』と書かれた一冊のパンフレット。

「都内でも有数のお嬢様進学校だが、幸い、お前の学力はここでも充分にやっていける」

それはそうだ。

両親も誰も知らないが、俺は人生二周目だからな。大学生だった男の前世を持って、美少女羽島伊吹（はしまイブキ）として生まれた俺だが、はっきり言って今世に敵はいないと思っている。

しかし、何故お嬢様学校なのか。

「周りに女子しかいない環境でも、自分が男だと言い続けるなら、お父さん達ももう少し

考えてみよう」
「でも、なるべく特待生で入ってね？　うち、あんまりお金は無いから……」
「……」

正直、このままでは埒が明かないとは思っていた。
周りに女子ばかり、というのは逆に言えば必然的にハーレムみたいなものだ。それに特待生を取るのも多分行ける。
……案外、悪くは無い提案にも思えた。女子校なんて前世も今世も全く縁はなかったが、興味は少しだけある。
俺は、小さくコクリと頷くと、パンフレットを持ってリビングを後にした。

2

「じゃあ、行ってくるよ」

あの日から半年が経った。
三月の春、何の問題もなく聖エスペランサ女学院の特待生枠を獲得した俺は、聖エス

ペランサ女学院の冬服に身を包んで、先に送った着替え以外の荷物をまとめた鞄を提げ家を出ようとしていた。
　ほぼ全額免除の特待生枠が１０個もあったので、特待生を取ること自体は真面目に楽勝だった。

「一人で大丈夫？　お母さん、心配よ……」
「大丈夫だって、母さん。父さんも、またね。夏頃には帰ってくるから」
「……頑張ってこいよ」

　手短にそう言う父と、涙をハンカチで拭う母を後目に、俺は十五年間慣れ親しんだ我が家を後にする。
　そう、聖エスペランサ女学院は全寮制なのだ。実際に見学にも行ってみたが、学院も寮も何もかもが広かった。これで、生徒数は一学年１００人～２００人なのだから、あまりにも贅沢過ぎる。
　早朝の肌寒さの中、最寄り駅から電車で比較的都会の方へ行き、時間通りに聖エスペランサ女学院直通の県外行きバスに乗り込んだ俺。
　一番後ろの端、窓側の席に座ると、ここからしばらくは揺られ続ける為、一眠りしよ

うとイヤホンを付けて目を瞑った。

「……」

「あ、あの……」

「……？」

すると、隣に座った誰かが俺の身体を本当に小さく、控えめに揺すった。

無視するのも可哀想なので、チラリと横目を向けると、少女がヒッと声を漏らしているのが見える。そう言えば、自分の目付きがちょっとだけ悪いことを思い出した。流石にレディース程ではないが、苛立っているようには見えたかもしれない。

初対面の恐らく同級生からの第一印象が悪いのは良くない。

慌てて俺はイヤホンを取って居住まいを正し、少女の方を向いた。よく見れば、美女美少女ばかりのこの世界でも目立つような整った顔立ちの気弱そうな小動物っぽい美少女だ。これは、余計に挽回しなくてはならない。

「ごめんごめん。オレってさ、目付き悪くて」

「こ、こちらこそいきなり声をかけてごめんなさいい……」

あー、これは完全に怖がられちゃったな。
ナンパしてくる男相手だとめちゃくちゃ役立つんだけど、これのせいで中学時代は女子の友達もあまり多くなかったしなあ。どうにかして関係を修復しなくては。

「オレの名前は羽島伊吹。君は？」
「羽島、伊吹さん……イブキさんですね。私は湊川真奈（みなとがわマナ）です！　よ、よろしくお願いしますね」

マナちゃん、結構距離の詰め方が強引だな。

「それで、オレに何か用だった？」

本題に入ると、マナちゃんは一瞬躊躇いを見せるも、遠慮がちに要件を述べる。

「……あの、もしかして特待生の人だったりしません、か？」
「え？　あー、うん。そうだけど、よくわかったね」

「あ、やっぱりそうですか」

真面目に俺が特待生だなんてよく分かったものだ。
当てずっぽうじゃなくて、結構確信めいた何かを持ってそうな聞き方だったし。
俺の疑問を悟った彼女は、その理由を語り出した。

「なんて言うか、お嬢様っぽくない？　っていうのかな。それに、気品のあるとか、そんなんじゃないけど、大人の落ち着きみたいなのがあった……から」
「へぇー、なるほど」

なんと言うか、マナちゃんは、こう、無自覚に核心を突いていく主人公タイプの女の子に見えた。

「私も特待生なので、お嬢様達の空気に馴染めなかったらどうしようって思ってたんですけど、イブキさんみたいな人が居てくれたら安心します」
「あ、ああうん。よろしくな」
「はい！　よろしくお願いします！」

マナちゃん……無自覚に失礼だな。
だが、何はともあれ、第一印象の挽回には成功したと見て良いだろう。マナちゃんが同じ特待生だったのは驚いたけど。
しかし、彼女の前では格好良い存在であれたら良いな、とオレはそう思うのであった。

3

そこからは、他愛のない談笑をしながらバスに揺られること数時間。
やっとの事で、バスは聖エスペランサ女学院に到着した。

「えっと、私の寮はこっちみたいです」
「あー、そう？　オレの寮はこっちっぽいから、ここでお別れだね」
「また、すぐ会えますよ！　それじゃあ！」
「ああ」

バスを降りて、めちゃくちゃ広大な学院に唖然とするのもそこそこに、寮区画に辿り着いた俺達は早々にそれぞれの寮に向かうことに。寮自体も沢山あるみたいで、なんと言うか豪勢な雰囲気の団地みたいになっている。

自分の寮舎を見つけると、やはりと言うべきか、目の前に立つだけでも気圧されてしまいそうなあまりの豪華さに呆れながらも、エントランスから中に入る。

そう言えば、この女学院では、一、二年生が相部屋らしい。三年生のみ、三年生同士または一人部屋となるのだとか。

「えーと、４０９、４０９っと」

４０９号室が俺に与えられた寮室だ。一体、どんな人が相部屋となるのだろうか。

廊下ですれ違う上級生も、皆お嬢様然としていて綺麗だった。憧れはしないが、とても良いと思う。多分、特待生同士は同じ部屋にはならないだろうから、俺の相部屋の人も十中八九はお嬢様に違いない。美人は三日でなんとやら、みたいなことにならないことを祈るだけだ。

「……ここ、か」

高級感溢れる木造ドアに取り付けられた、これまた仕立ての良さそうな金属の表札に書かれた４０９の数字を見つめる。

この先に、俺が今年一年間苦楽を共にする人が……。

ちょっとズレた心持ちだが、俺は覚悟を決めるとドアをコンコンとノックした。

「失礼しまーす」

「開いてましてよ」

おお、凄いお嬢様っぽい！

気品溢れる声に誘われて、俺はドアを開けた。

「貴女が、今年の特待生の羽島伊吹さん、ですわね？」

「……は、はい！」

まず、最初に目に入ったのは金。ブロンド。

そして、二つの美しい青。

白く綺麗に整った顔立ちに、その二つの色がどこまでも映える。

「わたくしは、燦全院透子（さんぜんいんトウコ）ですわ。よろしくお願い致します」

一言に言えば、俺はトウコさんから目が離せなくなった。

椅子に座りながらティーカップを手にしてにっこりと、柔らかく、美しく、麗らかに微笑むその姿は、正にお嬢様そのものだと言える。

まさか、こんなにも心が惹かれるなんて。もう、他の女子では惹かれないかもしれない。

それくらいには、衝撃的な出会いだった。

トウコさんは、手に持っていたティーカップを近くのテーブルに置くと、洗練された所作で立ち上がって俺の元へと歩いてくる。そして、少しだけ少しだけ腰を屈めて下から俺の顔を覗き込んできた。

「わたくし、此処、聖エスペランサ女学院の生徒会長を務めていまして。何か、困ったことがあれば言ってくださいまし」

「わ、分かりました……」

「ああ、もう。そんなに固くならないでくださいな。自然体の貴女が見たいですわ。イブキさん、とお呼びしても？」
「は、はい！　勿論！」

そ、そう言われたら仕方が無い。
断じて、上目遣いに心を掴まれたとか、良い香りに意識が持ってかれたとか、複雑でもあるが俺よりは小さいながらも立派な胸部に目を奪われたとか、そんなことは無い。
「……もう。とはいえ、あまり急かすものでもないですものね。お話でもしましょうか？」
「そ、そうですね！　喜んで！」

情けないことに緊張でガチガチに固まってしまった体をどうにか動かして、促されるままに対面するように椅子に座った。

「はい、どうぞ」
「ありがとう、ございます」

ソーサーごと手渡されたティーカップを受け取ると、中に注がれた紅茶の香りが漂った。

心做しか、緊張が解けたように感じる。

「……ふふ、写真で見るよりも……」

「え？」

「なんでもないですわよ。とても、可愛らしい方だな、と思いまして」

「え、あ、いや。オレなんかより、トウコさんの方が可愛いし、綺麗ですよ！」

「ふふふ、ありがとうございます。でも、お胸はイブキさんのですわね。羨ましいですわ」

「……胸なんて、邪魔なだけ、ですよ」

「あ、あら。申し訳ございませんわ。配慮が足りなかったようですわね」

あまり、胸とか尻とかの女性の特徴に関する話はされたくない。

そんな俺の雰囲気を悟ってくれたらしいトウコさんは、一言謝るとティーカップに口を付ける。

……気を使わせてしまった。あー、もう。まじで、情けなさ過ぎる。男らしくシャキッとしなければ。

「でも、貴女のお名前はわたくしが中学生の頃から度々お目にかかっていましたわ」
「ああ、模試、ですか？」
「ええ」

確かに、中学時代、俺は常に模試で全国一位、二位を取り続けていた。その度に、新聞なんかでも取り上げられたことがある。名前を知っていても不思議ではない。
あれ？　そう言えば、燦全院さんの名前もどこかで……。

「もしかして、燦全院さんも模試の上位ランキングにいました？　確か、見かけた気がするんですけど……」
「ええ。終ぞ、貴女に勝つことは出来ませんでしたけど」
「は、はは……」

なるほど。つまり、燦全院さんも俺並みに頭が良い、ということ。

やっぱりお嬢様って、頭が良いのもデフォルトみたいなものなんだろう。二周目の、言わばズルをしているような俺と違って、純粋に頭が良い。ちょっと複雑。

「でも、頭が良い、というのは素晴らしいことだと思いますわ。下級生の貴女に勝てなかったのは、少しばかり悔しいですけれども、ね」

「……ありがとうございます」

「いえいえ。ここでは、先輩と後輩。私の方が年季は上ですので、分からないことがあったら、なんでも聞いてくださいまし。先輩として、どんな事でも答えて差し上げますわ」

なんか、気張ってるのがしょうもなく思えてきた。こんなに良い人なんだ。緊張するなんて馬鹿らしい。

そう考えると、もう、先までの緊張は完全に無くなっていた。

そして、俺とトウコさんはティーカップを手に、主に俺がぎこちないながらも会話に花を咲かせて夕暮れまで時間を潰すのであった。

「それで、アキさんがですね」

「……んん？　……なんだか、眠気、が……」

「ああ、長旅のご様子でしたものね。それなら、あちらのベッドがイブキさんのベッドですのでお休みくださいな。長話に付き合わせてしまって申し訳ございません」
「い、いえ。お気になさらず。それじゃあ、オレ、ちょっとだけ寝させてもらいます」

ポカポカと体の芯から温まる感覚が眠気を誘い、ここでは倒れるまいと眠気に抗いながら、フラフラとした足取りで自分の方のベッドに向かう。
そして辿り着くやいなや、俺は気絶するようにベッドに倒れた。
ここでなら、やっていけそうだ。そんな安心感が、どこか、俺の中にあった。
だからだろうか。ニンマリと、お嬢様らしくない深い笑みを見せるトウコさんを、俺は認識出来ていなかった。

4

あれから、三週間が経った。
順調にトウコさんや、マナちゃんと仲を深め、先週には入学式を終えて本格的に高校生生活がスタートした感じだ。生徒会長としてのトウコさんの演説も凄かった。普通の高校の校長よりかはカリスマ的だった校長も、トウコさんの演説の前では霞んでし

まっていた。やっぱり、トウコさんは凄い。
高校生生活としては、最初、二、三日は周りがお嬢様ばかりであったのもあってクラスの中でも浮いてしまっていた感じがあった。が、みんな気さくで良い人ばかりだったのですぐにクラスで馴染むことが出来たと思う。
友達も何人か出来た。
そして、今日も今日とて自室でトウコさんと夜のお茶会をする。ここ最近、ずっと夜が待ち遠しい。
お茶会後は眠気が襲ってきて、パジャマなのもあってそのまま寝てしまうのだ。
ちなみに、少しだけ歯への着色とかも気になりはしたのだが、なんでも良い紅茶はあまり色素が歯につかないらしくそのまま寝ても良いのだとか。
ただ、ここのところ、何だか体の調子が変なのだ。ずっとうずうずするというか、お腹の下辺りが変な感じがする。
とはいえ、日常生活には支障がないし、もしも悪化するようなら病院にでも行こう。今は無視で構わないだろう。
ともかく、俺は今日もタンクトップにショートパンツというラフな姿で、トウコさんはお嬢様っぽい雰囲気の赤いパジャマでお茶会を楽しんでいた。
ティーカップに口を付けて紅茶を楽しんでいたトウコさんが、はたと、何かを思い出

したかのように口を開く。

「そう言えば、気になっていたのですけれども、イブキさんは処女なのですか？」

「うぐっ!?　けほっ、けほっ」

いきなりの爆弾発言に、紅茶が変なところに入って咳き込んでしまう。

ここ三週間でわかったことだが、トウコさんは少しだけ天然が入っている。流石に、常識が分からないとか、日常生活が心配になるとか、そういうわけではないのだが、時折こうした爆弾発言をかましてくるのだ。

「え、ええまあ、一応……」

「そうなのですね。てっきり、いつもそのような殿方を誘っているような格好をしていらっしゃるので、それなりに遊んでいらしても不思議ではないなと思っていたのですけれども」

「ごふっ!?　ごほっ、げほっ」

また口に含んでいた紅茶を咳き込んでしまった。

なんてことを言うんだ。俺が、男を誘っている格好？　そんなわけない。
確かに薄着過ぎて、父さんからは目を逸らされ、母さんからはお小言を頂戴したが、この十六年間、俺の傍には一度たりともそういう意味での男の影は無かった。男友達はそれなりに居たが。
口元をティッシュで拭いながら、抗議の視線をトウコさんに向ける。
「ふふ。冗談でしてよ」
「……もう」
「……でも、殿方なら絶対に貴女を放ってはおかないでしょうね」
なんとなく、空気が変わったような……？
呑気にそんなことを考えていると、徐にトウコさんが立ち上がる。
そして、普段とはどこか違った深い微笑みをたたえたままに、俺との距離を詰めてくる。
何故か、怖気が走って、椅子から立ち上がった俺はトウコさんから後退る。本能的な、そんな反応だった。
妖しい雰囲気に呑まれつつあった俺は、ふと、自分の後ろにトウコさんのベッドが

あってこれ以上は退れないことに気がつく。

「――――それは、わたくしもでしてよ♡」

「へ？」

トンっ、と簡単に押し倒された。

俺の上には、トウコさんが馬乗りになっている。

あれ？　え？　なに？

「ふふ、ふふふ。お可愛いこと」

「え。ちょ、ちょっと……トウコ、さん……？」

状況が掴めず困惑する俺の頬に手を添え、トウコさんは、ニンマリと口を弧の字に描いて嗤った。

もがいて抜け出そうと思ったが、そこで、俺は自分の身体が自分のものでは無くなったかのような違和感に気がつく。

「え、あ、あれ……？　うごか、ない……？」
「ふふふ。そうでしょう？」
「な、なに、を……？」

陰の差すトウコさんの顔を見上げる。
そこには、いつもの淑女然としたトウコさんではない、別の誰かがいた。
その、トウコさんの見た目をした、俺の知らない誰かは、深く深く微笑むと人差し指を俺の唇に這わせる。
背筋に走る、ゾクゾクとした奇妙な感覚が、鮮明に感じられた。

「……可愛らしい。ゴリ押してでも貴女を取れて良かったですわ♡」
「んうっ……！　ゴリ、押す？　取る……？」
「ええ。ここ、聖エスペランサ女学院では、名家の生まれの息女が特待生の子達を引き取ることができますの」
「……え」

唇から首筋へ。首筋から鎖骨へ。鎖骨から、俺の胸に提げられた豊かな双丘へと、指を這わせていく。

俺も馬鹿じゃない。ここまで来れば、俺が今どのような状況なのかが、薄々と分かってくる。

きっと、トウコさんは〝レズ〟なのだ。俺も男の人格だから男嫌いだし、実質レズみたいなもの。ちょっとだけ、ほんの少しだけ、先程までの恐怖心が治まって気分が舞い上がる。

「……トウコ、さんは……そう、いう趣味、なんですか……？」

「……？　ああ、女の子が好きかどうか、ってことですか？」

「……」

「そうですねえ。これを見たら、はっきりすると思いますよ？」

そう言って、トウコさんはロングスカートを外す。

憧れの人の生脱衣に、俺の心の中のちんぽは勃起寸前だった。

「まず一つ。勘違いを正しておきましょうか」

「勘違い？」
「わたくしは、貴女が思っているようなレズではありません」
「……？」

え、じゃあ、なんで？　なんで俺は襲われているんだ？　そう言えばさっき引き取ったとか、なんとか言っていた気がする。
困惑する俺を他所に、トウコさんはセーターとワイシャツを脱ぎ、ブラを外す。
ぷるん♡と綺麗な形をした美乳が姿を現し、俺の心の中のちんぽは射精寸前にまで昂っていた。

「わたくしは、女でなければ、貴女のような牝でもない」
「女じゃ、ない？　てか、え？　俺が、牝？」
「ええ。そして、この場においてのわたくしは――――」

牝呼ばわりされて怒らない男なんていない。
ここは男として、抗議しなければ。むしろ、俺の方が雄だ、と。
しかし、それより先に今まさに下ろされようとしている最後の一枚を、その先の絶景

を見なくては。

火照った頭で優先順位を決めて、トウコさんのアソコを凝視する。

ゆっくりとずり下ろされていくパンツ。高まっていく俺の興奮。前世も今世も含めて、これ程までに綺麗な人のアソコが見れるチャンスは、多分今しかない。絶対に焼き付けなければ。

そして、俺の興奮は一気に驚愕と恐怖に変換された。

「――――貴女を犯す、雄、なのですから」

「……へ？」

ぼろん♡と、そこにあるはずのないものが存在を主張する。

平らで淫らな平地があるだけのはずのそこには、いきり立ったおちんぽが存在していた。

え？　あ、え？　なんで、ちんぽが？

「うふふ。呆然としてしまうのも仕方がありません。貴女のようなおぼこは、私事です

がこんなにも立派で格好の良いおペニスは愚か、そもそも殿方の普通のおペニスすらも見たことがないでしょうから」

「……???」

未だ困惑から抜けられない。

どれだけ頭を回そうとしても、段々とモヤすらかかってきたように感じられる脳では大して期待もできそうにはない。もしかしたら、浅くなっていく呼吸で酸素が回っていないのかもしれない。

怖い。怖い。怖い。

あんなものがトウコさんについていることも、劣情がソレを勃起させていることも、そしてその劣情の矛先が俺であるということも。

全て、恐ろしかった。

それでも身体は全く動かないし、この状況を打開できるような何かが浮かぶこともない。思考はさらに覚束なくなる。身体中が熱くなっていく。

「あら、媚薬も効いてきたようですわね♡」

「び、媚薬……？」

「ええ。今までわたくしが慣らしのために使ってきた物よりも、少々強いものですが……初めては意識がトぶくらい気持ち良い方が良いでしょう。それに、ここまで三週間の間、じっくりと調教した貴女の身体ならこのおペニスを受け入れることも可能だと思いますわ」

媚薬。花のお嬢様、という印象には似ても似つかない異物。

そして、サラリと言われたが、この三週間、俺はそんなことをされていたのか。

目の前の存在に対する憧れや恋慕が、ここに到り、理不尽に対する苛立ちや疑念へと変換される。

ふつふつと、トウコへの怒りが増していく。

だが、怒りが増しても、どうにかできるわけでもない。

どうすれば。どうすれば、今の状態を脱してコイツの魔の手から逃れられる？

「うふ、うふふふ。無理でしてよ♡　わたくしから逃げれば、今日一日、この学院に潜む麗しきケダモノ達が、か弱く愛らしく何よりスケベな貴女を貪ろうと待ち構えていることでしょうから♡」

「……そんな……」

嘘だとは思えなかった。
様々な情報が、上手く回らない俺の頭にもそれを自明の事実であると認識させている。
今は。今は、従っておくしか、ない。
犯すのならばともかく、犯されるのは嫌なんだ。それが、男のソレを持つ相手に女として一方的に犯されるなんて、そんなの受け入れられるわけないだろ。
でも、これは仕方が無いことなんだ。それに、入れさせなければ良い。入れさせなければ……。

「……好きにしろ」
「それでは、早速♡」

そう言って、トウコは俺のタンクトップを脱がす。綺麗な肌と、俺が男だったら絶対に放っておかない１００センチメートル超えの爆乳が、外気に晒される。ブラは面倒だからつけていないが、今ばかりはそれを恨んだ。

「これは、また……とても美しい♡　これほどまでに美しさとイヤらしさを兼ね備えた造形美。幾億の調度品にも優る、最高の女体ですわ♡」
「……解説、するなあ……！」
「あらあら。お恥ずかしいので？　こんなにも可愛らしい方に、このようなドスケベな身体が備わっているだなんて、愛らしいことこの上ないですわ♡」

浅い呼吸で、上に向けてぷるんぷるん♡と揺れる爆乳を、触れるか触れないかの距離で凝視して解説するトウコ。あまりにも真剣だから、恥ずかしさが上乗せされている。
顔を上気させて、いやいやと首を振る俺の両の手首を掴むと、トウコはずいっと顔を近づけてくる。……って、あ。

「んむっ♡」
「んんっ!?」
「……うふふ。ファーストキスでしたら嬉しいですわ♡　わたくしはもう数え切れぬほどのオンナをメスに堕としてきましたが♡」
「〜〜っ！　オレを、一緒にするな！」
「きゃっ……！」

何とか動いた足が、怒りのままにトウコを軽く尻もちをつかせる程度だが蹴り飛ばした。

しかし、今のでさらに身体のダルさが増してしまった。

次は、どうやって回避する？　いや、どうすれば回避出来る？

トウコはゆらりと立ち上がると、ゆっくりと俺のほうへと近づいてきた。その顔は、笑っていない。

「……おいたするメスは、お仕置して躾て、調教しなければいけませんわね……！」

「ひっ……!?」

あまりにも強大な怒気に、情けないことに小さく悲鳴を漏らしてしまう。

いや、だって、本当に怖いんだって。いつも、優しげに柔らかく笑っている姿しか知らないから……。

いつの間にか俺の足元に立っていたトウコが、ハーフパンツとその下の下着の縁に指を掛けると、一気にずり下ろしてしまう。

媚薬のせいで、パンツからはねとぉっ♡とした糸が引き、もうドロドロになってし

まっていたおまんこが、トウコの目の前に晒される。

「え、ちょっ、ちょっと……！」

「あら。糸まで引いて、もうびしょ濡れ……暴れられないように、見えやすいように、より無様に可愛らしく、こうしてさしあげますわ」

「や、やめ……これ、恥ずかし、い……から……！」

どこから取り出したのか、縄で俺の手足をベッドの片側、その両端の突起に結び付けてしまう。

俗に言うマングリ返しのような体勢となってしまい、隠すことも、身動ぎすら出来ずにおまんこやアナルまで、トウコに見せつけるように晒してしまう。

うわ、これ、恥ずかし過ぎる。

ただでさえ赤い顔が、茹でダコのように真っ赤に染まった。

「ふうっ♡」

「ひぁぁぁぁ!?♡」

ゾクゾクっ♡とした感覚が背筋を通って脳髄に響く。吹きかけられたトウコの息が、俺のおまんこに刺激を与えたのだ。

息だけで、普段なら絶対に出さないような声を上げてしまった。その事実が、どれくらい今の俺の身体がやばい事になっているのか如実に教えてくる。

「ぱくぱくっ♡　って開閉して、時折とろぉっ♡と愛液を垂らす。……ふふ♡　思った通り、ド変態ですわね♡」

「〜〜っ!?♡　そ、そんなこと、ない！」

ド変態。そう詰られた時、身体にゾクッ♡とした感覚が走った。

俺は、それを認めたくない一心で言葉を紡ぐ。

「お、お前なんかに堕とされる程、オレはやわじゃない！」

「……♡　ふふ、ふふふふ……♡　イブキさん、貴女、どこまでも分かっていらっしゃるのね♡　それなら、わたくしも全力で堕として、犯し尽くして差し上げなくては♡」

トウコは、妖しく微笑んだ。

そして、ほっそりと長い指先で俺のおまんこをくちゅくちゅ♡と軽く弄ると、一気に二本の指を突き入れる。

「あ♡　あ♡　ぁあぁぁあ!?♡」

「……熱いですわね♡　ですが、きゅっ♡きゅっ♡　と締め付けてきて、今からおペニスが期待でどぴゅどぴゅっ♡　とお射精してしまいそうですわ♡」

「ふぅう……♡　んぅっ♡　ううっ♡」

口を噤んで、喘ぎ声が漏れ出ないようにする。

自分じゃないような、それでもそれなりに慣れ親しんだ自分の声が、こんなにも甘ったるく変容しているのを聞かされると、頭がおかしくなりそうだった。

「……ふふ♡　我慢するのは身体に良くないですわよ♡　今から、しっかり鳴かせてあげますわ♡」

「余計、なっ♡　お世話、だ！♡」

「その乱暴なお口も、今にメス啼きしか出来ないようになりましてよ♡」

ちゅこちゅこ♡ぬちぬち♡と、まるで楽器を奏でるように、はたまた玩具で遊ぶように、一方的に俺のおまんこを指で弄くり回す。

その度に、甘い刺激が俺を侵し、腰がピクっピクっ♡と跳ねてしまうが、しっかりと固定されてしまっているから、本当に腰しか動かせない。

「ここが貴女の弱点♡」

「んぎっ!?♡　そ、それやめ……!♡」

「それで、こっちも貴女の弱点♡」

「おへっ!?♡　にゃ、にゃんでそんな……!♡」

「可愛い……とても、とても可愛らしいですわ♡　ほら、ほら♡」

「あっ♡　んにいっ!?♡　ひいっ♡　や、やめっ♡　やめ、ろ♡　それ♡　やめてえっ!♡　んにゃぁあっ!?♡♡」

次々と引っ掻かれたり、ぐいっと押し込まれたりして、その度にぴゅぴゅっ♡と軽く潮を噴いてしまう。

身動きも取れず指先ひとつで簡単にイかされる。その事実が、俺の男としてのプライドをガリガリと傷付けていく。

それと引き換えに、言い知れない切なさを齎しながら。

「貴女のおまんこは、この三週間で完璧に知り尽くしましたから♡」

「……っ♡」

「もう、何処を触れば可愛らしい姿を見せてくれるのか、全部わかっていてよ♡」

それじゃあ、万に一つも勝ち目が無い……。こっちは媚薬に拘束に開発、そして、弱点という弱点が全部バレている。

何より、怖くてオナニーすら出来なかった経験皆無な俺と、経験の豊富そうな彼女とでは勝負にすらならないだろう。

……このまま、犯される……♡　そ、そんなの嫌だ。

……何としても、耐えなくては。耐えれば、ここから逃げ出せる。取り敢えず、マナちゃんの所にでも避難させてもらおう。

「他の女のことを考えていますね？」

「……え」

「そんな余裕があるなら……もっとキツくしても構わない、ということでよろしいのか

しら？」

「そ、それは……ま、待ってくっ……!?♡」

はっと気がついた時にはもう遅かった。

目からハイライトが失せたトウコが、俺のクリトリスに親指を当て、おまんこの中に三本の指が突き立てる。

それだけで、俺はいとも容易く絶頂から降りられなくなってしまった。

「――――ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!?!?♡♡」

「ふふ♡　ふふふ♡　ふふふふふ♡」

爆発する快感、スパークする視界、牝の絶叫。

それは、俺の余裕を奪うにはあまりにも強い。

5

「ぁぁぁぁ!!♡　も♡　やあっ♡　いくの♡　やぁぁ?!♡　いくっ♡　いくいくいくっ

！♡　いくううっ!?♡」
「潮吹き４３回目、ですわね♡　そろそろ、頃合いかしら？」
「ぁあー♡　あー♡　ぁぁぁ♡」

もう、数え切れないくらいイカされて。俺の体力は尽きかけていた。
身動きが取れない、というのが何よりも辛い。快感を逃せないから。
脱力した身体を労わるように、両手両足の拘束が解かれる。もう抵抗出来ないと思ってのことだろう。実際、もう俺は欠片も抵抗出来そうになかった。

「……もう辛抱溜まりませんわ♡　この程良くむっちりとしたお尻も♡　この大きさ良し、形良し、柔らかさ良しの爆乳も♡　今から、全部わたくしの物になるのですね♡」
「うう……♡　そ、そんなの……無理に、決まってえ……!?♡」
「まだ口答えするおつもりですの？♡」
「ひ♡　ひあっ♡　ち、ちくび♡　だめっ♡　だめえっ！♡」

人差し指と中指の腹で摘まれた乳首が、強く鋭い快楽をもたらす。俺には、抗うすべがない。

ぴとり♡と、俺のおまんこに添えられたおちんぽが、ずりっずりっ♡と準備運動を始めた。

ああ♡　犯される♡　俺、男なのに♡　こんな良い様にされて、処女まで奪われる♡

これまでの十六年間、揺らぐことなくあり続けた男としての感性が、人格が揺らぎを見せていることに気が付く。

ダメ、だ♡　絶対に♡　俺は、男なんだ♡

「んあっ♡」

「抵抗のつもりですの？　自分の抵抗でイくなんて、相当に仕上がってるみたいですわね♡」

きゅうっ♡と今にも受け入れようとしていたおまんこの入り口を、気合いで引き締めて閉ざす。

開発されてしまっていた俺のおまんこは、それだけの動きで白く濁った愛液を吹き出してしまう。

それが、俺の身体がもう後戻り出来ないところまで来させられているということを自覚させようとしてきているみたいだった。
俺の知らないところで開発されて、俺の知らないところで雄への媚び方を覚えてしまった雄失格の優秀な牝まんこ。
それでも、この些細な抵抗で少しくらいは……。淡い期待でおちんぽを見つめる。

しかし、それは簡単に砕かれてしまうのであった。

「良いですわ♡　それなら……せー」
「……っ」

破城槌のように引き絞られた腰。
尖端とおまんことの間に、先走りと愛液によって出来た最低な橋がかかる。あまりにも淫靡で、俺の目は釘付けになってしまった。
そして。

「――――のっ!!♡」

「お゛っ……？♡」

俺は、ガクガクと壊れてしまったかのように腰を上下させながら、潮を撒き散らして盛大に絶頂した♡

待って♡　だめ♡　オレのおまんこ、抵抗しなさすぎぃ♡

「ふふふ♡　オレっ娘爆乳ドスケベ生意気娘の処女、ゲットですわね♡」
「あぁ♡　ぁはあ♡」
「嬉しくて何も話せませんか？♡　うふふ♡　それなら動きますわよ♡」

あまりの衝撃に口をパクパクとさせていると、唐突に俺の両手に自らの両手の指を絡める、所謂〝恋人繋ぎ〟をしながら、正常位の姿勢でピストンを開始する。

「あっ♡　ひぉっ♡　んいっ♡　あっ♡　ああっ♡」
「甘い声が漏れてますわよ♡　ほらっ♡　もっと鳴きなさい♡」
「それ♡　やめっ♡　ぜんぶで♡　しょこっ♡　えぐりゃないでえっ♡」

ぱちゅんっ♡ずりゅんっ♡どちゅんっ♡と水音を立てて、結合部から、擦れ合う中から、突かれる最奥から快感が全身を駆け巡る。
イクことしか出来ない俺は、無様に潮を撒き散らかすほかなかった。

「どれだけイキ潮吹けば気が済むんですの？♡　溺れてしまいますわ♡」
「んおっ♡　んなことぉっ♡　イっ♡　いったってえっ♡　むりぃぃぃぃっ♡　イクッ♡　イクぅっ！♡　あむっ!?♡」
「ちゅっ♡　ちゅるっ♡　ぢゅぱっ♡」
「んあっ♡　ぷちゅっ♡　んむうっ♡」

トウコは、俺の唇を自らの唇で塞ぐと、さらにピストンを早める。
正常位で♡　恋人繋ぎで♡　キスハメなんて♡　これ、もう完全に恋人だよおっ♡
ピンクに染まりきっていた俺の脳内が、そんなことを考え始める。
もう、何もかも、おかしくなっていた。

「ぷはっ♡」

「んあっ♡」
「やっぱり、貴女を選んで良かったですわ♡　何としてでも、わたくしの物にして差し上げますから、覚悟しておきなさいな♡」

ピストンの動きがさらに早くなる。もう、終わりが近いのだろう。
このままでは、レイプされた挙句に中出しされてしまう。オンナになるなんて、孕むなんて嫌なんだ。嫌なはずなのに。
なんで……なんで……♡

「これ♡　レイプ♡　レイプなのにいい♡　なんでえっ!?♡」
「ふふ♡　わたくし達の身体の相性が最高、ということにほかなりませんわ♡」
「だめっ♡　ふざけ、るなあっ♡　オレのからだのばかっ♡　なんでよろこぶんだよおっ♡」

レイプのはずなのに。そのはずなのに、俺の子宮がちゅうちゅう♡と亀頭に吸い付いて精子を強請っているのが分かる。両足を組んでガッチリとトウコの腰をホールドしてしまっていた。

全部無意識だ。
俺の心はそれを拒んでも、メスとして完成しつつある身体は、執拗な開発の手腕と雄々しいおちんぽを持つトウコに全力で媚びている。
そして、絞り出すような動きをしてしまっているはしたないおまんこに、限界が来たのか、苦悶の表情と悦楽の表情を綯い交ぜにしたトウコがピストンを最大まで早める。
それだけで、俺はまたイキ地獄から戻ってこれなくなってしまった♡

「ふふ、ふふふふふ♡　あははっ！♡　貴女、最高ですわ！♡　飛び切り濃いの、イキますわよ！♡」
「っ!?♡　……いやっ♡　いやだっ♡　だすなっ♡　お、おねがいですっ♡　ださないでえっ♡」

恥も外聞も捨てて、俺は懇願する。
孕ませられたら、俺は本当に女になってしまう。それだけは拙い。
しかし、俺の恥辱の懇願はバッサリと切り捨てられてしまう。

「出すに決まっているでしょう♡　貴女を孕ませて、一生わたくしの手元に置いておく

つもりなのですから♡」
「ひっ!?♡　そ、そんなのいやっ♡　らめっ♡　オレ、オレはおとこだかりゃあっ！♡」

言ってしまった。
自らが男であることを暴露してしまった。しかし、これで多少は萎えてくれる……か？

「あはっ♡　あはははは！♡　貴女、本当に最高ですわね♡　そんなドスケベでド変態で最高に絞まりの良い名便器まんこを持った自称雄なら、同じ雄のピストンでもへばったり、イったり……ましてや、孕んだりはしないですわよねえ？♡」
「へ？　あ♡　うそっ♡　それ♡　だめっ♡　まって♡　まってまってまって♡」
「孕みなさい♡　孕んだら、許してあげるわ♡」

トウコは、始まりみたいにおまんこからおちんぽをずるずると引き抜き、限界まで腰を引き絞る。
そして、俺の柔らかな大きい尻を鷲掴みにすると、綺麗な微笑みを浮かべた。
あ♡　だめだ♡　これ♡　死ぬ♡　男としての俺が、死んじゃう♡

俺は、いやいやと弱々しく首を振って懇願するが、それが聞き入れられることは無い。

「――――イクっ!!」

「――――んほぉぉぉぉっ!?♡　あついの♡　でてりゅうううっ!?♡♡」

!?!?♡

快感が強すぎて、脳が焼ききれる。白目を向いてアヘ顔を晒し、鼻からはぷっと血が吹き出た。それと同時に潮と尿も。

「あっ♡　あへっ♡　おほっ♡」

「やっぱり、貴女には凛々しさよりも、その無様可愛い姿がお似合いですわよ♡」

一息に突き入れられたおちんぽが、俺の最奥で爆発したのだ。

吐き出された精子が、元気に俺の子宮内を泳ぎ回っているのが分かる。分かってしまう。

「はあっ♡　はあっ♡　気持ち良かったですわ♡　って……生きてますのー？　おー

い」
「あ♡　あへっ♡　おひっ♡」

潰れたカエルのような姿勢で、未だにちょろちょろ♡と小便を撒き散らして、無様にイキ続けるオレの頭を、トウコは愛おしそうに撫でる。
俺も無意識ながらに、猫のように頭を委ねてしまった。

……もう、戻れる気がしない。でも、オレは男だ。こんな無様にアヘ顔晒してても、オレは男、だから。

「……ぜ、ぜったいにゆるさねえ♡」
「あら？　そんなこと言って良いのかしら？」
「……へ？」

さあっと血の気が引いていくのが分かる。媚薬で火照っていた身体が嘘みたいだ。
トウコが見せてきたスマートフォンには、オレの顔。それも、あられもないアヘ顔。スクロールすると、そこには様々なオレの痴態が鮮明に保存されていた。

「こうして弱みを握っておけば、貴女はわたくしには逆らえない♡」
「この、げすがあっ♡」
「ふふ♡　それでは、また明日もよろしくお願いしますわね？　イブキ♡」
「……♡」

もう、逃げられない。これから先、二年間、オレはずっとトウコの性処理便器として扱われるんだ……。
……♡♡
また頭を撫でられながら名前で呼ばれた時、どうしようもなく下腹部が疼いてしまった。
オレに反応してか、ぴくんっ♡とトウコのおちんぽが跳ねる。
……アレが、さっきまでオレのおまんこに……♡

恐ろしくなって目を逸らしながらも、オレは、未だに隆起するそのおちんぽをちらりと見遣り、未だに温かさと快感の残る下腹部を摩るのであった。

後編

1

レイプされたあの日から、今日で一ヶ月になる。

そろそろ本格的に暑くなってくる頃だ。学院でも、半袖にカーディガンやセーター姿の生徒が増えてきた、ように思う。

かく言う俺も半袖だ。廊下ですれ違う先輩や、今も学院の屋上で昼飯を食べながら話しているマナちゃんからは、大胆だってびっくりされたけど。スカートくらいなら履けるようになったが、それでも季節の服装は男の時のようにラフなままが多いように思う。

「それでですね？　ユイ先輩が、私の書いた小説を褒めてくれたんですよ！」

「へえ。良かったね」

「はい！」

マナちゃんは、なんでも小説家志望らしい。結構打ち解けてきたのか、先日教えてく

れたのだ。
同室のユイ先輩とやらも良い人そうで、オレとしては羨ましい限りだ。
……本当に、なんであんなやつと同じ部屋になっちゃったんだろうか。あれを反省して、写真や動画も消してくれるなら、まだ許し……はしないけどそこまで恨みもしなかった。
なのに、トウコは懲りるどころかオレを見つけると事ある事に『貴女みたいな牝フェロモン垂れ流しのドスケベ女がいるからおペニスが怒り心頭ですわ。トイレで一発ヌかせなさい』とか『もう。どれだけわたくしをムラつかせるつもりですの？　お仕置して差し上げますから、今ここで全裸になりなさい』とか言って、ハメ撮り写真を盾にされたらオレに拒否権はない、から……。
思い出すだけで、媚薬も何も無いのに身体が熱く火照るようにまでなってしまった。これは不味い。早急にどうにかしないと。
そう思いながら、購買で買った美味しいパンを頬張っていると、マナちゃんが何やらモジモジしながらオレを見つめているのに気が付いた。
「……あの、イブキさん。先輩とは上手くいって……ますか？」
「……んー。まあ、それなりだと思うよ。マナちゃんは？」

「えっと……うん。私もそれなり、です。多分。良くしてもらってるから……」

はあ。本当に羨ましい限り。トウコもオレにいろいろと良くしてはくれているのかもしれないけど、レイプの件やその後のアレソレのせいでマイナスに振り切れている。

すると、意を決したかのような佇まいでマナちゃんが口を開いた。

「ただ、時々変なことをしてきて……」

「……変なこと？」

変なこと、変なことかあ。

……心当たりがあり過ぎる。変なことしかされてない。

彼女も特待生だから、そのユイ先輩とやらもトウコみたいな、まあ、その、そういう奴なんだろう。でも、マナちゃんの様子を見る限り、そこまで酷い人ではなさそうで良かった。

でも、目の前の少女が、オレの友人がオレと似たような憂き目にあっていると考えると、少しだけ複雑でもある。

「この学院の人って、やっぱり、女の子同士でのそういうことが好きなのかな？　って……」
「……っ♡　……あー、そうなのか……。いや、オレはよく分かんない。確かにスキンシップは多いかも知んないけど」
「そ、そうですよね！　ごめんなさい、変なこと言っちゃって……」

マナちゃんの言葉から思い出してしまった陵辱の記憶。
それを認めたくないオレは、否定の言葉を紡ぐ。
少しだけ気まずい空気が流れてしまう。何か話題はないかと頭を巡らせていると、ぽんぽんと肩が叩かれた。
それだけで、身体が思い出してしまって……いや、びっくりしてしまって悲鳴が上がる。

「ひっ……♡」
「ふふ♡　イブキ♡」
「……なんだよ、トウコ……さん」

振り返れば、そこに居たのは例のアイツ。流石に誰かがいる所で生徒会長であるコイツを呼び捨てには出来ない。

オレの最大の敵意の対象である女、トウコは、口元にいつもの頬笑みを浮かべてそこに立っていた。

俺の向かいにいるマナちゃんの姿を認めると、洗練された所作で優雅にお辞儀をする。

「マナさん、ですわね？　わたくしはイブキのルームメイトの」

「燦全院生徒会長ですよね!?　私は湊川真奈です！　会えて嬉しいです！」

「ええ、如何にも。わたくしこそ、会えて嬉しいですわ、マナさん」

感無量と言った感じでペコペコと頭を下げるマナちゃんのことを見るトウコの眼差しは柔らかく温かかった。

そう言えば、マナちゃんはトウコのファンなのだとか。そんなに素晴らしい存在ではなく、どうしようもなくドSでド変態のクソ野郎なのだが、そんなことをマナちゃんに言えるわけもない。やっぱり、複雑な気持ちだ。

このまま去ってくれれば良いのに。そう思っても、トウコが何もせずに帰るはずもな

く。

「……♡」
「え、あ……それは……」
「……おい、トウコさん……！」
「……ふふ♡」

何やらトウコがマナちゃんに耳打ちすると、彼女は顔を赤くして俯いてしまった。
ただ事ではない。文句を言おうとトウコに詰め寄ると、彼女はあろう事かオレの無駄にデカい尻肉を鷲掴みする。

「んあっ♡　……っ！」
「あらあら♡　ちょっとからかい過ぎたみたいですわね♡」

嬌声を上げてしまったオレは、恥ずかしさと怒りで、トウコの手を払い落とす。
まだマナちゃんは立ち直っていないようだ。今の声が聞かれていないことを願うばかり。

トウコはオレの肩に手を回すと、耳元に口を近付けてきた。

「イブキ……後で、キツいお仕置ですわよ♡　覚悟しておきなさいな♡」

「……っ♡」

「マナさん、わたくしはイブキさんに少しばかり用がありますのでここで失礼致しますわ。行きますわよ、イブキ」

恥ずかしさと恐怖心で体が強ばったオレは、トウコに促されるまま、屋上を後にする。この後に何をされるのか、それは勿論気になることだが、それ以上にマナちゃんのことが気掛かりであったオレは最後にマナちゃんの方をちらりと一瞥する。

彼女は、やはり何かに耐えるように俯いていた。

2

「あうっ♡　んひぃっ♡」

ぱちゅんぱちゅん♡と水音と肉を叩く音が、トイレの個室に響く。

また、微かに漏れ出たような喘ぎが、性臭漂う其処に伝播して、淫靡な雰囲気を助長させた。

「あっ♡　ぐうっ♡　んうっ♡」
「このっ♡　わたくしの手を叩き落とすなんて！♡　許せませんわ！♡」
「あひっ♡　んあっ♡」

いつもの5割増しくらいに苛烈なトウコのピストンが、出来上がったオレのおまんこを蹂躙する。

両手をトイレの蓋について、片足がトウコの肩に持ち上げられた状態でのセックスは、気持ち良さよりも恥ずかしさの方が少しだけ強く、オレの反抗の気を確実に削いでいた。

「他所のメスと仲良くランチをしている暇があるならば、わたくしのおペニスを如何に気持ち良く出来るか考えてなさいな！」
「おっ♡　んあっ♡　あっ♡　や♡　そこ♡　やあっ♡」
「っ♡　そんな、可愛らしく喘いだって許しませんわよ！」

「ひうっ♡　か、かわいらしくなんてえっ♡　してないいいっ♡」

ゴリゴリとおまんこを削るようなピストン。そして、子宮ごと潰すような子宮口への執拗な突き。

取り繕う余裕もないくらい、オレは感じさせられていた。

「もう、すっかりメスですわね♡」

「や♡　ちがっ♡　オレは、おとこっ♡　おとこだかりゃあっ！♡」

「まだ自分をオスだと勘違いしていらっしゃるの？　もう♡」

「あぁぁあっ♡　それっ♡　それやめてえっ！♡」

子宮口をグリグリされると、出したくもないのに絞り出すかのような喘ぎ声が出てしまう。それが無性に恥ずかしいのに、何処かその快楽には安心させられてしまう。

ダメだ♡　これダメ♡　これが続くと変になる！♡

その思いで身をよじるが、細い腰を、両の手でがっちりと掴まれると、自分が性処理のための道具に成り下がっているみたいに思えて、屈辱と変な気分に見舞われる。

「ふっ♡　ふっ♡　ほら♡　イブキ♡　イってしまいなさいなっ！♡」
「らめっ♡　ささやくの♡　らめらってぇ！♡」
「んぐっ♡　この♡　急におまんこ締めるんじゃないですわよ！♡　もっとしなさいなっ！♡」
「あうっ♡　そ♡　そんなの♡　むりっ♡　じぶんじゃ♡　こんとーるできにゃいからぁぁぁあっ♡」
「っ♡　出来てますわよっ！♡　好い娘っ♡　とっても好い娘っ！♡」

おまんこを激しく突かれながら、今みたいに耳元で優しく囁かれると、無意識におまんこが締まってしまうのだ。
ここがトイレであることも忘れて、オレは猫なで声のように媚びた声を出しながら、ぷしゃっ♡と潮吹き絶頂をキメてしまう。

「イクっ♡　イブキ♡　イきますわよっ！♡　子宮で受け止めなさい!!♡」
「だめっ♡　なかだし♡　やだっ♡　もうへんになりたくないっ！♡」
「だぁめですわよ♡　しっかりと中出しされて、女の喜びを知りなさい♡」
「うっ♡　イクッ♡　また♡　またイグッ！♡」

ラストスパートに入った腰使いが、無遠慮にオレのおまんこを突き上げて、オレは為す術もなく連続絶頂する。

「ふふ♡　登って来ましたわ♡　いぐっ♡　おまんこにザーメン出るっ♡　イクイクイクッ!!♡　射精るッ!!!♡♡」

そして、オレの中を埋め尽くす熱く硬いおちんぽが膨らんだかに思うと、次の瞬間、圧倒的な量のザーメンを吐き出した。

「んぁぁぁあっ!!♡　これだめっ♡　はらむっ♡　あかちゃんできるぅっ!!♡」

ビチビチと活きの良さをこれでもかと知らせるように、精子の群が子宮口に殺到し、こじ開けてオレの子宮に襲いかかった。

あ♡　だめっ♡　女の子みたいにイっちゃう♡　オレ、男なのに♡　中出しキメられて、メスイキしちゃう♡

精子一匹につき一回はイっているんじゃないかと思う程の連続した絶頂に、口をだら

しなく開いて舌を突き出しながら、白目を向いてしまう。

「うっふ♡　イきまくりおまんこに下品なアへ顔♡　また滾って来てしまいましたわ♡
　責任取ってもう一発ヌかせなさいな♡」
「あ……♡　うぁ……♡」

　放心するオレを他所に、どろりとザーメンを垂れ流すオレのおまんこに、再度おちんぽがあてがわれる。
　止める間もなく、未だに硬さと熱を持ったおちんぽが挿入されたところで、オレの意識は途切れた。

3

　ガニ股状態でおまんこをほじくり、便器の中に出された精液を排泄する。もしも妊娠なんてしてしまったら、オレは絶対に狂う。それに、それはイコール女であることを認めたと言われても言い訳出来ない。

「ん♡　……くっそ……」

媚薬も何も使っていないのに、オレの身体はもう既に何も準備せずとも、雄を受け入れられるようになってしまっていた。

それが、今は何よりも辛い。

自分が男であると自負するなら、別の男を中に受け入れるなんてありえない。処女を失うということは、即ち、オレが自分を女であると認めた時だけだと思っていた。

だが、現実は男とも女とも分からないような存在によって無理矢理にレイプされた形で。

それが、余計にオレの神経を逆撫でする。

男にレイプされたなら、ソイツをぶっ殺せば良い。でも、見た目女なアイツに犯されたことが、どうにもオレの中で変な火種になって燻っているのだ。

「んふっ♡　んんんっ♡」

このままじゃいけない。

思い至ったオレは、必ずトウコとのこの関係を終わらせてみせると誓い、最後の一掻

きで潮を吹いて絶頂した。

4

「それで？　わたくしのことが嫌いなのに、おまんこはキュンキュンして潮吹きしちゃうイブキは、わたくしに何の用があるんですの？」
「〜〜っ！　うるさい！　そういうのは良いから！」
「ふふ、からかっただけですのよ」

椅子を翻して、高そうな執務机越しにこちらを見るトウコの目は、やっぱり、何処かオレを見下しているような、慈しんでいるような。そんな妙な視線で見られるのはごめんだった。

「……それで？　わたくしに可愛がって欲しいというのでしたら、ここで始めても良くてよ♡　そんな、ムチムチしたメスの身体を見せられたら、わたくしのおペニスも黙ってはいられませんもの♡」
「そんなんじゃない……！　トウコ……話がある」

放課後、トウコ以外の面子がいなくなったのを見計らって、オレは生徒会室へと赴いていた。
理由はもちろん、はっきりと訴えてこの関係を終わらせる為だ。
流石のコイツでも、同じ人間で、それも子供のはず。オレはトウコよりも精神的には二倍年上だ。ここは、年長者としてこういう行為がいけないことであると言わなくてはならない。それに、彼女が同意してくれたら、歪なこの学院もどうにか出来るかもしれない。

「あら、奇遇ですわね。わたくしも、今日の夜のことで、お話がありましてよ」
「……!」

もしかしたら。もしかしたら、己の行いを悔いてくれているのかもしれない。オレは淡い期待を抱く。
今なら。そう思ったオレは、トウコを説得するために口を開いた。

「この関係を終わりにしよう」

「……ふふ。ここも奇遇なようですわね」
「……！　本当にっ!?」

執務机に手を着いて身を乗り出すようにして確認を取るオレに、トウコは妖しく笑いながら口を開く。

「ええ。ですが、条件がありますの。流石に、わたくしも立場というものがありましてよ。極上の孕袋をむざむざ取り逃がしたとあっては、聖エスペランサ女学院の生徒会長の名折れ以外の何者でもありませんわ」
「……なんだよ、その条件って」
「それは、二つ」
「んっ♡　な、なにすんだよ！」

すると、トウコは徐に目の前で揺れているオレの胸に手を伸ばす。右の胸を鷲掴みにすると、揉みしだきながら口を開いた。

「ふっ♡　んいっ♡　や、やめろって♡　あんっ♡」

「まず一つ目は、この学院が運営する、ふたなり淑女の為の有料動画配信サイトに一度出演してもらうことですわ」
「ゆ、有料動画配信サイトって♡　それって♡　え、ＡＶ♡　っじゃねえかっ！♡」
「ええ。似たようなものですわね。ですが、このサイトは厳正な審査を通ったふたなりの淑女しか閲覧出来ませんわ。野蛮な殿方に見られる心配はありませんわよ」
「んうっ♡　そ、そんな問題じゃなくてぇっ♡」

尚も揉み続けられる胸から登ってくる快楽に、段々と腰が砕けてきてしまう。立っていられなくなったオレは、胸を下敷きにする形で執務机にもたれかかってしまった。

「ふふ♡　流石は自分のことをオスだと言い張る、マゾ雑魚メスなだけありますわね♡」
「んぅぅっ！♡　ひあっ♡　ち、乳首ぃっ♡　カリカリしないでえっ♡」
「ここですの？♡」
「んにぃっ!?♡　つ、抓るのもだめえっ♡」

膝がガクガクと笑い、腰が快感に震える。
すると、いつの間に移動したのか、俺の真後ろに来ていたトウコが両手でオレの胸を

揉みしだき始める。

「そして、その動画の中でわたくしの攻めに屈することなく、わたくしの物にはならないという宣言をすれば、名実共に貴女は私の手から離れる、というわけですの」

「んおっ♡　乳首っ♡　は、はじくのらめっ♡　おっ♡　んあっ♡」

「……もっとも、この程度の愛撫でアヘりかけている貴女如きでどうにかなるとは思いませんけれども」

自分でも悲しくなるくらい開発されてしまった身体は、もはや、オレの物ではなく、トウコの物であることを認めつつある。

この提案に今乗らなければ、もう次は無いかもしれない。もしも、チャンスがあっても、次の機会ではもう……。

過ぎった最悪の考えを頭を振ることで振り払い、オレはこの話を受けることにした。

男としての矜持がある。オレは、負けない。

「ふふふ♡　それなら、明日はお休みですから、早速今夜から明日の朝まで生配信ですわね♡　貴女がどこまで耐えられるのか、見物ですわ♡」

「……ぜってえに、耐えてやる。オレは、お前のものなんかじゃねえって、んっ♡　証明してやる……！」

「楽しみにしておきますわ♡　……ああ、それと。こちらを着てきてくださいませ」

オレの言葉により一層笑みを深くしたトウコは、生徒会室を出ていく直前に、思い出したかのように懐から何かを取り出して、未だに地面に座って肩で息をするオレへとその何かを投げる。

「……っ!?」

「オープンランジェリー、という物ですわ♡　きっとお似合いになることでしてよ♡」

それは、乳首の部分とおまんこの部分の布だけがきりとられたような、黒の下着。

目も当てられないその様に、オレは握りしめながら、トウコに抵抗する。

「こ、こんなもの着られるか!?」

「もしも着て来ていただけないのでしたら、このお話は無しということで。もちろん、生配信には出演していただきますが♡」

「……分かったよ。着れば良いんだろ、着れば！」
「ええ♡　それでは、わたくしも準備がございますので、また後程♡」

優雅なお辞儀でその場を去るトウコ。
静かになった生徒会室に残されたのは、恥ずかしい下着を片手に頬を赤らめるオレだけだった。

5

入浴時間も終わった夜九時過ぎ。
自室の洗面所で、屈辱的なオープンランジェリーに着替えたオレは、両手で胸と股間を隠しながら居間へと足を運ぶ。
「あらあら♡　やっぱりとてもお似合いですわね♡」
「……うるせえ」
そこには、ニマニマと嫌な笑みを浮かべるトウコと、本格的なセッティングがされた

配信道具、そして、いつの間に運び込んだのかキングサイズのベッドが鎮座していた。
これから何をされるのか。想像するだけで顔が赤く染まり、湯だったように火照り始めてしまう。
絶対に、この機会を逃すわけにはいかない。戦場に赴く心構えで、招かれるままにトウコの隣へと腰掛けた。
キングサイズベッドのふかふかとした感じと、程よい反発。そして、さりげなく腰を撫で回すように回されたトウコの手。
……いまからここで……♡

「あら？　もう堕ちてしまわれたのかしら？」
「〜〜っ！　そんなわけないだろ！」
「そう。それなら良かったですわ」

すると、トウコはオレを膝の上に乗せて、唐突に下着の布のない部分から露出するおまんこと乳首を弄り出す。

「あっ♡　も、もうするのか？♡　んっ♡」

「ええ。時間ももったいないですもの♡　さっさと準備を……ああ、そう言えば、もう配信始まってますわよ？」
「……え」
「ほら」

促されて、目の前を見ると、そこには一台の本格的なカメラが無機質なレンズにオレの痴態を映し出していた。
羞恥にただでさえ赤い顔が更に赤くなる。

「そこのディスプレイにコメントが出ますわ。しっかりと確認すること」
「……あ、ああ」
「じゃあ、始めましょうか♡」

再度始まる攻め。
オレは、先程トウコが指したディスプレイに緩やかに流れていくコメントを目で追うことにした。

：トウコの番は生意気系なのね。分からせてあげるのが楽しそう。
：あら？やっと配信されてることに気が付いたみたいだわ
：結構頭悪そうだねー

生意気系とか、頭が悪そうとか、失礼な先輩だ。
……って、なんか、今日♡　激しい？♡
オレの反感を他所に、トウコの手の動きが加速していき、オレはあっという間に高めさせられる。
グチュグチュ♡と部屋に響き始めた水音。トウコが、オレのおまんこから溢れる愛液を掬い手で弄んで、胸へと運び、塗りたくっていく。
オレの愛液ローションで滑りが良くなったことで、指先が踊り、乳輪をなぞり、乳首を扱かれてしまう。
「そんなことないんですのよ？　この娘、実は、わたくしよりも頭が良くて」
「あっ♡　あっあっあっ♡　イクッ♡」

「三年間不動の模試一位様ですものね♡」
「だめっ♡　ほんと♡　もうイクッ♡　イッちゃうから♡」
「イッて良いですのよ♡　ほら♡　イけ♡　イけ♡」
「ぁぁ♡　イっ♡　イクッ♡　イクゥッ！♡」

あまりの快楽に腰が引けてしまうが、おまんこへの容赦ない追撃と耳元での囁きで、あっという間に一回目の潮吹き絶頂をしてしまった。

：へぇー意外
：気持ち良さそうなアクメ顔ですね
：おっぱいもお尻でかいね。何センチあるの？
：そうだ、自己紹介してよ

「あっ♡　クリ♡　ひっぱらないでっ♡」
「ほら。アクメに浸ってないで、先輩方に自己紹介しなさいな♡」

「わ、分かった♡　わかったからやめっ♡」
「ほら♡　もう一回イっておきなさい♡」
「イクっ♡　イクっ♡　イくぅぅっ！♡」

二度目の潮吹き。
これ以上イカされたくないオレは、必死に自己紹介の言葉を紡ぐ。

「オ、オレは、あっ♡　羽島、イっ♡　イブキっていいますっ♡　んっ♡　バストは１０５ｃｍでっ♡　ひっ♡　ヒップは、９１ｃｍですっ♡　あ♡　だめっ♡　また♡　またイっちゃぅぅっ!?♡」
「堪え性の無いメスですわね♡」

：イブキちゃん、どっちもデカイね
：これは、トウコちゃんも良い娘見つけたねえ
：それに感度も抜群ですね

クリトリスを弾かれながら、乳首をすり潰されると、それだけでまた潮を吹いて絶頂する。簡単にイってしまうように作り替えられた身体では、絶頂を我慢することは不可能だ。

だから、オレは、イクのは我慢しないで心だけは折れないようにする。それが、作戦とも言えない今回のオレの作戦だった。

「潮、とまらないいいっ!?♡」

「もう♡　軽くおもらしですわね♡　この歳にもなって♡」

：デカ乳デカケツ生意気美少女メス堕とし生配信っていうから来たのに、もうほとんどメス堕ちしてるじゃないですか

：まあ、トウコのテクニックに勝てるメスなんていないからね

：腹立たしいことに、私のメスも寝取りましたからね

「あらあら。その節はごめんなさい、ですわ。お詫びに、今度、わたくしが一番愛してるこの娘を皆さまでマワさせて差し上げますから、それで手を打ってくださいまし」
「あぁぁぁぁ!?♡　イクッ♡　もうイきたくないぃっ!!♡」

：そうですね。それなら良いでしょう
：この極上のメス肉が堪能し放題なんて、いまから勃起が収まらないわ
：やっぱり、メスは肉付きが良い方が好きだなあ

「ほら♡　わたくし以外のおペニスも堪能出来る乱行パーティが取り決められてしまいましてよ♡　良かったですわね♡」
「よ、よくなひぃぃぃっ!?♡　なんで♡　なんで勝手に決めりゅのぉぉっ!?♡」

流れていくコメントは、どれもオレを犯したいという意志をありありと見せている。中には、孕ませて結婚したいとか、一生監禁してイカせ続けたいとか、頭がおかしくなりそうな事も書き込まれていた。

：やっぱりドＭなんだねー
：ケツ穴が弱そう（小並感）
：多分、露出とかにも向いてるだろうね

「あら良いですわね♡　今度、貴女のお友達のマナさんの持ち主でもあるユイにケツ穴を掘らせてあげましょう♡」

唐突な聞き覚えのある名前に反応する。
やっぱり、マナちゃんも酷い目に合わされているに違いない。

「っ！　マナちゃんは何されてるんだ!?」
「ああ、知らないのですわね♡　ユイは、ケツ穴にしか興味が無い困った子で、彼女と同じ部屋に置かれたメスは一生前の穴では満足出来なくなるようにされてしまうんですの♡　わたくしが勝ち取って良かったですわね♡　最初貴女に目をつけていたようで

すから♡」

「……っ！　やっぱり、どいつもこいつもおかしい！　なんなんだここは!?」

トウコの拘束を振り払って、距離を取る。

マナちゃんの所に行って、マナちゃんを連れてどこかに避難しよう。他の特待生の子も連れて行けたら連れて行こう。

まずはここから脱出しよう。そう思って考えを張り巡らせていると、空気が一変したことに気が付く。

身体がガクガクと震えて、逃げようとした意識が萎え萎んでいくような、そんな感じ。

「流石においたが過ぎましてよ」

その下手人である女、トウコが顔を能面のように無表情にしてこちらへと歩み寄ってくる。

……に、逃げないと。これは、不味い。捕まったら、駄目にされる。

本能的に分かってしまう。

「わたくし、親切に仇で返されるのが、最も嫌いですのよ」

怒気を露わにするトウコは、今、完全にキレていた。

ついにオレは1ミリも動くこと叶わず、トウコが目の前に立ち塞がる。そして、オレの両頬に手を添えると拒む間もなく、オレの唇と自らの唇を重ねてきた。

「ぶちゅっ♡　ちゅばっ♡　ぢゅるっ♡　ぢゅぞぞっ♡」

「んぅぅぅっ!?♡　んっ！♡　んんんんっ!?♡　んーっ♡　んんんん♡」

口内に侵入してきた舌が、オレを一瞬にして蕩けさせた。

すごい♡　なに、これ♡　何も出来ない♡　何も、考えられなくさせられる♡

断続的な快感に腰を震わせて、内股にした太ももへとドロドロの愛液と吹き散らかされるイキ潮が滴って地面のカーペットに染みを作る。

「ぷはっ♡」

「はあっ♡　はあっ♡　も、もうやめ♡」

「あむっ♡　ぢゅぞるるっ♡　ぢゅぱっ♡　ぶちゅっ♡」

「んんーーー!?♡　んーっ！♡　はぷっ♡　んむぅぅっ!?♡」

：あー、始まった。トウコのお仕置ベロチュー

：これされたメスって、みんなおまんこ自分で差し出すようになっちゃうよね

：まあ、もうチェックメイト寸前だったし、この娘もこれでアウトでしょうね

「んっ♡　んぅぅっ♡　んんんんんんっ!!♡」

「……ぷはっ♡　あら、ションベン漏らして気絶する程気持ち良かったんですのね♡」

気が遠くなるほど続くキスとも言えないような、貪るようなベロセックスに、オレはいつの間にか意識を手放してしまった。

6

「お、っ!?♡♡」

いきなりの痛みすら伴うような強い快感に叩き起される。
どうやら気絶してしまったオレは、トウコに膝枕をされてしまっていたらしい。先程までの怒気はナリを潜め、いつもの優しげな笑みを浮かべながら、オレの髪の毛を手で漉いている。

「起きたみたいですわね♡」
「あ、あれ……」
「ほら♡」

ぺちんっ♡と何かが頬を叩く。熱くて、変な臭いがする。
これはなんだろうか。寝ぼけた頭で、すんすんと臭いを嗅いだのがいけなかった。
その臭いを嗅いだ瞬間、下腹部から登ってきた快感の波に、気が付けばオレは暖かな液体を漏らしながら浅くイッていた。

「あ♡　あぁぁぁ♡」
「あらあら♡　おペニスの臭いで発情しておしっこ漏らすなんて、すっかり嬉ション癖

が付いてしまったようですわね♡」

：完全にメスの顔でおハーブ生えますわね
：私も嬉ションさせてあげたいですね
：流石におちんぽの臭い嗅いでおまんこ弄り出しちゃったら、もうお終いね

流れるコメントを見てハッとする。
無意識に股間に伸びていた手が、おまんこをぐちゃぐちゃ♡と弄り、浅ましく快感を求めていた。
それが恥ずかしくて、手遅れな感じがして、知らぬ間に涙が出てしまう。

「うっ♡　いや、なのに♡　おまんこ、いじるのやめられないぃ♡」
「よしよし♡　それがメスとして正しいことですのよ♡」
「ひぐっ♡　あ♡　あたま、なでるなぁ♡」

：しおらしくなってしまって、まあ
：やっぱり生意気でも本性は女の子ですね
：この場合はメスだよねー

しばらく頭を撫でられると、落ち着いてきて、今度は羞恥心に襲われる。
すると、トウコが撫でる手を止めて口を開いた。

「これを挿入したら、貴女はメスになりますわ」
「……っ！」

そう言って、正直言ってオレの前世のモノより2倍近く大きいおちんぽを見せつけてくる。
ムワッとした熱気と、滴る先走り汁が、早くオレの中に入りたいと懇願しているみたいで無性に恥ずかしい。それに、本当は嫌なのに、どこか嬉しくも思ってしまっているのが、もう訳が分からなくてどうにかなってしまいそうだった。

「そ、そんなの♡　入れるわけ、ないだろ♡」
「ふふ♡　それは貴女の自由ですわ♡　もし、挿入しないと言うのでしたら、またキスして差し上げて、その後にもう一度聞きますから♡」
「〜〜っ♡」
「まだまだ、たぁっぷり♡　時間はありますもの♡」

先程のキスを思い出して、快感と恐怖に震える。
唇をなぞりながら、オレは押し黙った。
あんなのをもう一回されたら、おかしくなる♡

「ほら♡　ほら♡」
「そ、そんな臭いものでたたくなあ……♡」
「そうですわねえ♡　言ってませんでしたけど、これが最後の機会ではありませんことよ♡　また定期的に生配信はしますから、その度にチャンスはありますわ♡」
「……そ、そうなの、か……？」
「ええ♡」

まだ次がある。次があるから、今回はこの快楽に溺れて良い。
……こ、今回は諦めて、また次回に頑張った方が良い♡　うん♡　きっとそうだ♡
だから、早く、早く終わらせよう♡　こんな無駄な時間は、良くない♡　おまんこに良くない♡

「ほら♡　何か、言うことがあるでしょう？」
「……う、うう……はい……♡」

ほ、本当に、生配信されてる中で言うのか？　オレが？
……そんなの……そんなの……♡

：あーあ
：堕ちましたね
：調教済みなのに一時間持ったんだし上々じゃないかしら？

オレは開脚すると、自ら見せ付けるようにおまんこをくぱぁ♡と開いて、トウコへと願う。終わりの言葉を、口にする。

あ♡　ダメだ♡　これ♡　言ったら、本当に男として終わっちゃう♡　待って♡　だめ♡　言うな♡　言わないで♡　……あ♡

「――――オ、オレは、トウコ……トウコお姉様の、んっ♡　従順な姉妹メス奴隷です♡ど、どうか、その逞しいおちんぽ様を、オレのおまんこに恵んでくださいませ♡」

「ええ♡　もちろんですわ♡」

…おー

…見事なメス堕ち懇願ですね

…やっぱり、メスはここまでが1セットですわね

「これで、今宵のイブキはわたくしだけのメス穴♡　さあ、楽しませてもらいますわよ

♡」
「……ぐすっ、ううっ」

言って、しまった。オレは女なんかじゃ……ましてや、メスなんかじゃないのに……。
パリンっと、オレの心の何かが砕け散るような気がして、後悔と寂しさと切なさと苦しさに心が埋め尽くされるより早く。
疼くオレのおまんこに、待ち侘びたおちんぽが挿入された。
瞬間、オレのありとあらゆる思考は、おちんぽが齎す快楽によって、全て押し流されてしまった。

「んほぉぉぉぉおっ!?♡」
「よく言えましたわね、イブキ♡」

生臭い嬌声を上げて、両手両足でトウコお姉様をホールドする。
ただの挿入。一回のピストンにも満たないソレが、圧倒的過ぎる質量で、オレがおちんぽを入れる穴しか能がない、ただのメス♡だってことを教えてくれる。
これ♡　これだ♡　おちんぽ♡　おちんぽが欲しかったんだ♡　オレの中を埋めつ

くして♡　元男だとかそういうの全部どうでも良くさせてくれるこのおちんぽが♡
ずっと欲しかったんだ♡

「ふぅ♡　はっ♡　んふっ♡　とろとろであっついのに♡　すっごい締め付け♡　今日は完全に堕ちるつもりで来たんですのね♡」
「おっ♡　おほっ♡　ち、ちがうぅ♡　んおっ♡　そんな♡　つもりじゃ、あっ♡　イクッ♡」

ぞりぞり♡とオレのおまんこの弱い部分を削るような動き。メスとしてよわよわなオレには、その攻めに耐えられない。

「おっほ♡　あはっ♡　んんうっ♡　おぉんっ♡」
「やっぱり、イブキは下品にアヘアヘ言ってる方がお似合いですわよ♡」

おまんこの奥を執拗に突き回されると、自然と口が窄まって、オレの口から出たとは思えないような下品な喘ぎ声が漏れてしまう。

「おっ♡　おっ♡　んおっ♡　あ、イクッ♡　いくっ♡　イックゥウ！♡」
「もう、ションベンだか潮だか、それとも愛液なんだか分からなくなって来ましたわね♡」

：もう完全に私達は蚊帳の外ですね
：あんなドスケベなおちんぽ懇願されたら、私も収まらないよー
：くぅ、今すぐにでも押し掛けて、あのピンクなケツ穴にぶち込みたい
：アナルのすぐ側にホクロがあるの、エッチ

お尻をカメラに向けての種付けプレス体勢のせいで、オレの恥ずかしいところ、ケツの穴がくぱくぱ♡しているのが丸見えになってしまっている。
恥ずかしさでおかしくなりそうだが、そんな気さえ、おまんこへのプレスで容易く霧散させられる。

「おっほ♡　そ、そこ♡　ゴリゴリって♡　されるとお！♡　あ♡　ぁぁぁ！♡　ひ

ぐっ♡　イぐぅっ!?♡」
「ここが好きなんですのね♡　組み敷かれるのが好きなんて、やっぱり、メス以外の何者でもないですわ♡」
「やだやだやだ♡　ほ、ほんとはぁ♡　メスなんかに♡　なりたくなんてないのぉお！♡」
「もう手遅れでしてよ♡　後で、『ドスケベ生意気クール美少女わからせ』のＡＶを観ながらパコりますわよ♡　もちろん、主演はイブキとわたくしですわ♡」
「……♡　そ、そんなの、ぜったいみない♡　みないからあ♡」

それって、オレがどれだけ無様で惨めではしたなくて下品でドスケベなのかが丸わかりの、この生配信のことじゃないか♡　そんな物を観直しながらセックスだなんて♡　歪む♡　性癖歪むう♡　こうやって、プライドズタボロにされてわからされるの♡　癖になっちゃうぅ♡

「うぐっ!?♡　い、いきなり締め付けるの、本当におやめなさいな！♡　わたくしのおペニスに悪いですわよ♡」
「だ、だってえ♡　そ、そうぞうしたらあ♡」

「ふふ♡　想像しておまんこ締めるなんて♡　やっぱり、イブキは変態ですのね♡　それじゃあ、遠慮なく、一発目ドピュりますわよ♡」
「え♡　ちょ、ま♡　おうっ!?♡」

オレの制止の声を無視して、トウコの全力ピストンが始まる。
オレのことなんか、俺のおまんこのことなんか全く考慮してない、ザーメンを排出する為だけの自分本位なセックス。
……なのに♡　なのにぃ♡

「なんでぇ!?♡　なんでこんなに気持ちいいのほぉ!?♡」
「わたくしのおペニスと、イブキのおまんこが相思相愛だからですわよ♡　あー♡　気持ち良いですわあ♡」
「あぁぁぁあ♡　らんぼうセックスだめ！♡　きもちよくなりすぎちゃうからぁぁあ!?♡」
「気持ちよくなって良いんですのよ♡　だって、わたくしとイブキはオスとメス、番なのですから♡」

オスとメス♡　番♡　夫婦♡

こんな、逞しくて強くて、オレのくそ雑魚おまんこを容赦なくボコボコにして気持ちよくしてくれるおちんぽ様と、トウコお姉様と番だなんて♡

……そんなの、幸せ過ぎるのぉ♡

「はぁぁあ♡」

「もう♡　またションベンチビったんですのね♡　粗相は治らなそうで、やっぱり少し心配ですわ♡」

「ごめ♡　ごめんなさひぃ♡　でも♡　でも♡　イキすぎて♡　うれしすぎて♡　おしっこ、とまんにゃいんですぅ♡」

恍惚とした心持ちのままに、緩みきった尿道から暖かな液体が漏れ出て、アンモニア臭を漂わせる。

イキ過ぎて、水浸しになっているベッドの上で、オレは更なる醜態を晒しながらも、心の中ではどこか満たされていた。

「そんな、可愛くて悪い子には、お仕置とご褒美のダブルピストンですわ♡」

「あ♡　おっ♡　らめっ♡　そんなのらめっ♡　もっとほしくて♡　もっともっと、かわいくてわるいこになっちゃうからぁ！♡」

：あー、これはダメだ
：そんなこと言われたら……うっ
：流石のトウコでも、これはアウトだろうなあ

「〜〜っ!?♡　もう！♡　もうもう！♡　どこまでわたくしを滾らせれば気が済むんですの!?♡　この！♡　この、メスガキッ！♡　イけッ♡　わたくしのピストンでイキ死ねっ！♡」
「あっ♡　いくっ♡　ずっとイクッ♡　おねえさまのピストンで♡　オレ、イクのとまらにゃいいいい!!♡」

降りることなく、ずっと絶頂が押し寄せてくる。
噴水のように潮が吹き散らかって、それでも、なお、オレのおまんこを蹂躙するピス

トンは終わらない。それどころか、段々と余裕のなさが増してきて、更に加速していく。
その度に、オレのおまんこは嬉しさでトウコお姉様のおちんぽに絡み付き、締め上げ続ける。

「うっ♡　そ、ろそろ……♡　まずいですわね♡」
「……だして、ください♡　おねえさまのあかちゃんなら、はらみますからっ！♡　だしてっ！♡　ザーメンだひてくらさいっ！♡」

：ここで種付け懇願は卑怯
：生意気クール娘は一転すると、ドロドロ甘えんぼ娘になりますから。仕方ないですわ
：イブキママの子供の名前は、私が決めます！

「……言質は取りましたわよ。絶対に責任は取りますから、わたくしのロイヤルザーメンで孕みなさいっ♡」

「はいっ♡　はいっ♡」

アへ顔のまま、もう一度トウコお姉様を全身でホールドして何度も頷く。

好きな人の子供を孕む。これが、メスとして正しい在り方。オレの本当の在り方なんだ。

――――トウコお姉様の為なら、オレは女で、メスで良い♡

「ふっふっふっ♡　もうそろそろイきますわよ♡　覚悟は良くて？♡」

「……ふぁい♡　もちろんです♡」

フィニッシュに向けて、トウコお姉様のピストンが速まる。オレの子宮口を亀頭で何度も耕し、孕む準備を万端にさせてくる。

オレは、トウコお姉様のザーメンを今か今かとまちわびて、子宮口は勝手に開いてしまう。

「完璧ですわね♡　はあっ♡　はあっ♡　ザーメン登ってきましたわ♡　これは、ぶっ濃いですわよ♡　妊娠確実ですわ！♡　受け止めなさい！　♡」

「ひいっ♡　うけとめましゅっ♡　おまんこにロイヤルザーメンためこんで、らんしぜんぶじゅせいさせちゃいましゅっ♡」
「良い心がけですわ！♡　も♡　もう限界っ♡」
「〜〜っ！♡」

最後の一突きが子宮口を突き抜けて子宮内に亀頭を侵入させる。
その埒外の快楽で、オレは不細工なアヘ顔を晒して絶頂し――――
「射精るッ!!♡　精子、ドピュる！♡　孕め、イブキっ！♡」
「んっほぉぉぉぉぉお!?♡♡　いぐっ♡　じゅせいアクメ、いっくぅぅっ!!♡」

――――トウコお姉様専用のオレの赤ちゃんの部屋に、熱々の子種汁が解き放たれ、オレは人生で最も深く、最も大きな絶頂を味わった。
ビクンビクンと身体が跳ねて、潮吹きを何度しても、浅いイキと深いイキが交互に来てイクのが終わらない♡
「こんなに濃いのは初めてですわ……」

「あっ♡」
「そんな寂しそうな顔しなくても、後でもっとぶち犯して差し上げますわ♡
わたくしのイブキ♡」
「〜〜っ♡」

やっと落ち着いて、しばらく放心状態でいると、トウコお姉様がおちんぽを引き抜いてしまう。
オレの心中を察してくれたトウコお姉様の優しげな手のひらがオレの頭を撫ぜて、おちんぽが抜けたせいで生まれてしまった喪失感を埋めてくれた。

：素晴らしい百合を見た
：トウコもとうとうお姉様かあ
：イブキちゃんを末永く可愛がってあげてね

「もちろんですわ♡」

「トウコお姉様ぁ……♡」
「まだまだ今夜は始まったばかりでしてよ♡　さあ、第二ラウンド開始ですわ♡」
そう宣うトウコお姉様の顔は、どこまでも凛々しく雄々しくて。
ただのメスでしかないオレは、おまんこがきゅんきゅん♡するのを止められなかった。

7

夏休みも終わり、今日でこの学院に来て半年になる。家には帰っていない。ずっと、寮部屋であの人と一緒だったから。
あの後、オレがどうなったか？
……そんなの、決まってるだろ♡

「イブキ、奇遇ね」
「あ、トウコお姉様！」
目敏くその姿を向けたオレが駆け寄って抱き着くと、愛しのトウコお姉様はオレの頭

を優しく撫でてくれる。
　夏休みの連続交尾や露出調教、オレのメス堕ち生配信を観ながら完堕ちしてしまったらしいマナちゃんとユイ先輩を交えたオレのアナル開発大会なんかもあって、完全にメスとして覚醒させられたオレの身体。常に発情状態で疼きが止まらないが、それも、こうしてトウコお姉様を見てしまうともう大変。
　我慢が出来なくなったオレは、トウコお姉様の手を胸に挟んではしたなく腰を揺らしながら、潤んだ眼を向けてトウコお姉様に懇願する。

「きょ、今日も、その……オレをメスにしてくれ、トウコお姉様♡」
「ふふ♡　もちろんよ、イブキ♡」

　男だなんだと言い張っていた頃の自分が哀れで、すぐにでもメスになることの悦びを知っていれば良かったのにと、今では黒歴史寸前の後悔の記憶だ。
　オレに、こんな悦びを教えてくれたこと、両親には感謝している。このお腹の中の子の名前はあの二人に決めてもらうつもりだ。
　でも、それまでは――――

「大好きだぞ、トウコお姉様……いや、あなた♡」
「ええ♡　わたくしもですわ、イブキ♡」

――今日も、オレはお姉様兼旦那様のふたなりチンポで女に、メスにされる。
それが何よりも幸せだった。